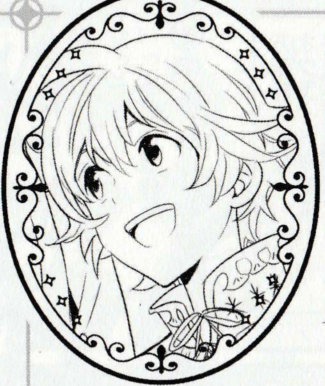
Into The Night
千年迷宮の七王子
Seven prince of the thousand years Labyrinth

登場人物紹介



ユアン・ジュノー
本編の主人公。
弱冠１６才で皇帝の位に就いた。
前向きであきらめない性格。

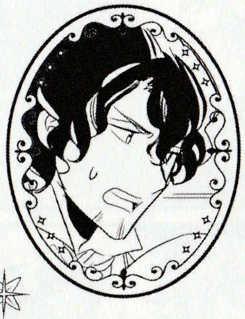
ロレンス・アクロイド
ユアンを護る騎士団長。
前皇帝の実子で
生真面目な性格。

メサイア・リード
現宰相で元有名な探偵。
過激派の元で育った
過去がある。
頭脳派と思いきや
手が早い。

タイタス・
ラム
元盗賊団首領。
お化けが苦手だが
他に怖いものが
無いらしく
何事にも頭から
突っ込んでいく。

ザン・
オーデュポン
元帝国一の
カリスマ歌手。
盲目で霊感が強い。
穏やかなロマンチスト。

オーガスト・
モーガン
元豪商の御曹司。
現実主義者で
常に女装している。



ギデオン・
レッドフィールド
元青年運動家で
理想家。
基本的に
馴れ馴れしい。

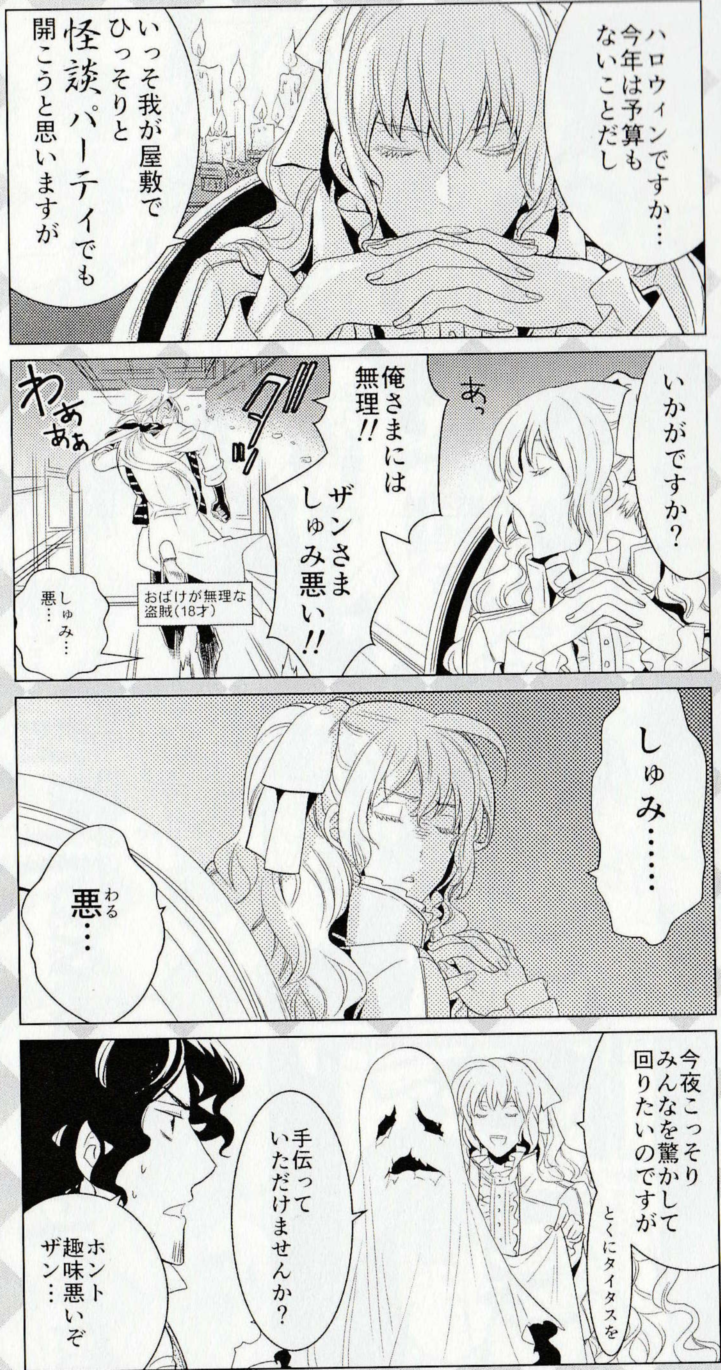
フェイ・
アクロイド
ロレンスの義理の
弟でともに
オーガストの
幼なじみ。

オセロ・
ブラックモア
いまはもう亡き
危険な化学者。
メサイアのことが
好きすぎておかしい。

Halloween 4koma

①アクロイド兄弟恒例行事

②たまに気にするひと



Halloween 4koma

Halloween 4koma

③誰もいない

④今夜のメンバーは

こうして阿鼻叫喚の一夜は始まった…

Halloween 4koma

『千年帝国のハロウィン』
作画＝花鶏、ネーム＝相川

しかし…
城の全てを見回っていたら夜が明けてしまうぞユアン
ん？
なんだか賑やかだなあ
皆…？
こんな夜中になにやってんの？
見てのとおりですよ
よければ君たちもどうですか？
うん！全部見て回ったらね！
バン

さて次行くぞー
一時間後
あれ…？
また皆のところへ戻ってきちゃった…？
迷った…？
また…？
なにを言っているのです？ユアン
君がここへ来たのは今夜はこれが初めてですよ…？
ロレンス！大変だ！
城の中に精霊が入り込んで魔法をかけてるよ！
やっぱり戸締まりが不十分だったんだよ！
大丈夫だユアン必ず護りきる
今日のザンは大人げないな
少しからかうぐらいいいではありませんか
今夜は楽しいハロウィンなのですから
俺さまが連れ戻しにいってやるよ
頼むから服は着ていってください
それザンが楽しいだけだよね…
おわり

千年迷宮の七王子 番外SS

八人目に出会う場所

本文：相川　扉絵：花鶏

◆

「申し訳ないが、撫（な）でまわさないで頂きたい」

と、静かだが険のある声が聞こえてきてユアンはハッとなった。

部屋の中央に置かれた仰々（ぎょうぎょう）しい台を隔（へだ）てて、自分が立っている場所のちょうど向かい側だ。

そこには確かメサイアとギデオン、それと少し離れたところにタイタスもいたはずだ。

「俺じゃないからな」

「嘘言わないで下さい」

またメサイアの冷ややかな声が聞こえた。

メサイアがギデオンの『可愛がり』に対して突き放すような態度を取ることは珍しくはないが、それにしてもすこし棘（とげ）のある言い様（よう）だった。

「いくら俺でもこの場の空気を読まずにいきなり誰かにスキンシップを挑（いど）んだりしないぞ」

ギデオンのぶつぶついう声が続いた。

「おっさんは信用ないんだよなー。普段から無駄にスキンシップ激しいし」

ユアンが立っている側（そば）の少し離れたところから呆れたように誰かが言った。

ユアンに近い壁際にはザンが居て、声の主はその向こうに居るようだった。

オーガストだ。

「暗闇で身動き取れないのに乗じて触りまくろうなんて卑（ひ）怯（きょう）すぎるぞ」

「だから俺じゃないって！人を変態みたいに言うな！」

ギデオンが抗議した。

「だいたい近くに居るって言えばタイタスもそうだろうが！」

「俺さまがなんだよ？」

タイタスの返答はやや予想とは違い、ユアンが思うよりも遠くから聞こえてきた。

「奴は先ほどから壁際に移動している。腰抜けにもほどがあるが、また居もしないお化けとやらを想像して震え上がっているようだ」

メサイアが淡々と告げると、すぐ怒鳴（どな）り声が返ってきた。

「だれが腰抜けだ！まちがいなくなんか変なモノが出るだろうがよ、こういう場所は！」

その応（こた）えは腰抜け以外のなにものでもなかったが、ともかくメサイアを撫でまわしていたのはタイタスではなさそうだ。

「位置関係でいえば、先ほど扉の閉まる直前に、ユアンは僕の向かい側に居たのを見かけている」
「いるよメサイア」
「そうして当然のようにロレンスが後ろに張りついていると思われる。が、これは実際に確認はしておらず、ただの予想だがおそらく間違ってはいないだろう」
「それで間違いない」
ユアンのすぐ後ろからロレンスの声がした。
手を伸ばせば届きそうな位置だ。
ユアンが後ろ手に少し探ってみると、暖まった金属とそれを掴む指に触れた。
どうやらこの空間に入ったときから、ロレンスは片時も剣を離さず握りしめているようだ。
―そこまで用心するような場所かな？
ユアンは考えた。
―だってここには俺たち七人しかいない。いつもの七人だ。最近は全員が揃うこともなかなか難しいけれども。
「ザンはその後ろですか？」
「私はユアンたちの側の壁際にいますよ」
「そしてオーガストはその脇に」
「ああ、その通り。僕はここだ」
「いま皆が耳にしたとおりです。僕の近くには貴方しかいない。…つまり…」
勿体ぶるようにメサイアは言葉を切った。
探偵をやっていたときの癖らしく、タイタスなどにはウザいと嫌がられている話し方だが、ユアンはそれが結構好きだった。
なんといってもワクワクする。
こんな暗闇のなかで聞いているときにはとくにだ。
「犯人は貴方でしかありえないのだよ、ギデオン！」
真実を突きつけるように彼が言うと、もうギデオンが犯人としか思えなくなる。
いや、探偵は常に正しい。
だからもうギデオンが犯人でいいやと暢気にユアンは考えた。
そもそもユアンはギデオンに背中をどやされたり肩を組んでこられたりするのが嫌いではない。
生まれ育ったマーレ島ではいつも幼なじみのジェドと肩を組んだり腕を組んだりして歩いたものだ。
だからメサイアがなぜそこまで目くじらを立てているのかが理解できなかった。
この少しあとにその深刻さが明らかになるのだが…。
「犯人とか言うな！人聞きが悪すぎるだろ！だいたい俺は何も…」

たまりかねたようにギデオンがやや声を大きくする。
その時だ。
「…すみません、お話の途中で申し訳ないのですが」
静かな声がギデオンを遮った。
「おそらく…ですが、この部屋にはもう一人居ると思います」
ザンのひと言に全員が息を飲む。
ユアンは驚いて、思わず全身を硬くした。
もう一人居るだって…？
この閉ざされた部屋の暗闇の中、お互いの顔を確認することは不可能だが、確かにさっきは七人しかいなかったのだ。
「私には聞こえたのです…八人目の足音が」
穏やかでよく通る声がそう告げると、全員が口を噤み、暗い部屋は水を打ったように静まりかえったのだった。

◆

『この城の中にいまだ発掘されていない宝物殿がある』と言い出したのはタイタスだった。
今朝は珍しく七人全員が朝食のテーブルに着いていた。
どんなに忙しくても一日の始まりにはなるべく皆で顔を合わせたいとのユアンの希望で、皇帝の朝食のテーブルには常に七人分の食事が用意されていたが、それでも全員が揃うことは近頃は稀だった。
皆はユアンの仲間であり同志でもあったが、同時に七国それぞれの王でもあったので、領地へ帰っていて皇城に居ないこともあったし、単に忙しくて出てこられない時もある。
それでもギデオンなどは仕事を持ち込んででも毎日のようにユアンの食事が終わるのを待ってくれていたし、ロレンスが姿を見せない日はまずなかった。
オーガストも朝食が無理だった日には欠かさず午後のお茶の時間にはやってきて、ユアンの無駄話に付き合ってくれている。
ザンが領地のオクト＝ノクテから戻ってきたのは昨夜のことで、今朝のテーブルはその旅の話で賑やかだった。
久々に全員が揃っているのに気がついて、ユアンは食事を終えてもなかなかその場を去りづらい気持ちになっていた。
席を立とうか迷いつつ、手元にいるネズミのリイプにパンの皮をちぎってやりながら皆の話を聞いていたら、いきなりタイタスが席を立ち大股でユアンの隣までやってきて、

一本の鍵を目の前に置いたのだ。
「なに？」
手のひらほどの大きさの鍵は酷（ひど）く古めかしかった。
全体を覆っている細かい装飾は長い年月の間にかなり摩滅し剥（は）げ落ちていたが、それでも作られた当時の美しさは想像できる。
ユアンはそれがなにか特別な鍵のように感じられた。
この皇城に隠された古い宝物殿の鍵らしい、というとタイタスはにんまりとした。
一国の領主になってもまだお宝を追う快感は忘れられないものらしい。
「それでそのお宝を探し出したいって？しかしこの城の宝は全てすでにユアンのものなんだぞ。わざわざ探し出し出さずともな」
ギデオンがパンをかじりながら報告書の束（たば）から顔を上げて言った。
「いいではありませんか。秘された宝を追うことそのものがロマンなのですから」
ザンがうっとりと言う。
しかし意外なことに、
「いや、本当にそんなお宝があるなら見てみたいね」
と現実主義者（リアリスト）のオーガストが言い出したから一同は揃って「おや？」という顔になった。
「お前がロマンに興味を持つなんて珍しいな」
食事を終えてユアンの背後で待っていたロレンスが呟く。
確かにそうだとユアンも思う。
普段のオーガストなら『ロマンとか言って遊んでないで働けよ』とでも言いそうな話だった。
「馬鹿言え、僕が興味があるのは『ロマン』なんかじゃない。その『お宝』だ！」
フォークの先を突き出し呆れるようにいうと、オーガストは改めてテーブルの上に身を乗り出した。
「実はな…この城にはもうめぼしいお宝がひとつも残って無いんだよ」
ギデオンが「そういえばそうだったな」とため息をつきながら書類を皿の脇に放り出した。
「代々続いた為政者の散財が響いて皇城は赤字だらけだった。そのヤバすぎる財務状況を健全化するために、前皇帝が城中のお宝を貴族どもに売り払ったようだ」
「ああ、そういえば父は美術品や宝石になんの興味もない人だった」
父ならためらいなく売り払っただろうな、とロレンスが頷いた。
亡くなった前皇帝のエルバートはロレンスの実の父親である。

彼はきわめて堅実な実務家で、だからこそ恨みを買ってあんな不幸な死に方をするはめになったともいえた。
そういえばロレンスもお宝にはなんの興味もなさそうだな、とユアンは考えた。
彼の父と違うのはそれが歴史上価値のある遺物なら話は別だというところだ。
「でさ、ここからが肝心なんだけど」
とオーガストが話を続けた。
「そんだけ売り払ってもなお財務状況はいまだ危機の真（ま）っ只中（ただなか）にあるわけなんだよ」
ユアンもそのことはわかっている。
だから財務を担当するギデオンが彼らの中でとくに忙しいのだ。
国民を救うための事業計画を練り上げても、その全てがお粗末（そまつ）な台所事情の前では机上の空論に成り果ててしまう。
そうやって毎日理想と現実の狭間で身を粉にしているわけなのだった。
「なるほど。話はわかりました」
先ほどから押し黙っていたメサイアがいきなり口を開いたので、ユアンは不意打ちを食らって心臓がドキドキした。
彼にはオーガストの話の帰結がまだ見えなかったので、なにが「なるほど」なのかと二重の意味でびっくりしたのだ。
「つまりは隠された宝物殿を探し出し、その宝を財政の足しにしようというのですね」
「そうそう、さすがは宰相殿、察しがいいね！」
オーガストがメサイアに向かってフォークの先を振りながら、嬉しそうに叫んだ。
「しかし…今まで発見できなかったものをそうやすやすと見つけられるのでしょうか？」
とザンがいうと、メサイアはさらに音もなく立ち上がった。
「ご心配なく。その宝物殿ならすでに発見済ですので」
と一礼してみせる。
「な…なんだって？」
「いったいいつのまに…」
あっけにとられる一同にかまわず、メサイアは手にしていた年代物の羊皮紙を開いた。
いつのまにあんなものを持ち込んでいたのだろう？
まるで鍵を持ち込んだタイタスと示し合わせたようだ…とそこまで考えてユアンは気がついた。
おそらく二人はこの件で最初から組んでいるのだ。

たしかに元名探偵と元盗賊団の首領が協力したならば、この世で見つからないお宝などないだろう。

「これはそこの元盗賊がガラクタ倉庫を漁って見つけてきた、この城の古い見取り図です。ただし自力では解読が叶わずに、僕のところに泣きながら持参したというわけなのですが」

「泣いてねえから」

確かに見取り図は複雑怪奇な代物だった。

今居るこの城のものだといわれても面影が見当たらずにユアンは困惑した。

幾重にも描き直された間取り。

古いインクがうっすらと残るその上に、それよりは新しい線が描き足されており、脇に残る注意書きは滅びたはずのイグニス文字だ。

そうしてその全てが朽ちる寸前の羊皮紙の上でぼんやりと混ざり合っている。

これはタイタスが泣いてもしかたがない…。

「だから泣いてないからな？性悪のほうこそ、俺さまがこれをちらりと見せびらかしたとたんに顔色変えて飛びつきやがったくせに」

タイタスが唇を尖らせた。

「しかも毎晩寝る時間を削ってまでこのちんぷんかんぷんな図面と嬉しそうに睨めっこだぜ」

「なんだ、やっぱりメサイアも宝物殿に興味津々だったんだ？」

ユアンがそういうとメサイアは少し決まり悪げに視線を逸らした。

「ご存知のようにここはイグニス時代の遺構に増改築を重ねて作られた宮殿です。いつか詳しく調べてみたいとは常々思っていましたので」

「確かに。地下でイグニス様式の壁が露出しているのを見かけたことがあるな。調べてみる価値のある場所ではある」

ロレンスが同意した。

いつのまにかテーブルのそばに寄ってきて、メサイアの掲げる図面を食い入るように眺めている。

ロレンスはもともと歴史学科の生徒だし、なかでもとりわけイグニス時代を専攻としていた。

メサイア自身も幼い頃からイグニスの伝説に憧れ、探偵になってからはその秘宝の行方を捜し続けてきたと聞いている。

そんな彼らがイグニス時代の宝物殿に興味を持たないわけがなかった。

「もちろんすぐに飛んでいってお宝を漁りたかったんだけどよ」

タイタスがメサイアを指した。

「こいつがそれには手続きが必要だというもんで」

「手続きって？」

「まず城の宝物庫の代表管理者であるギデオンの同行が必要です。それと皇帝陛下のサイン」

メサイアが書類を差し出した。

「それさえあれば宝物殿の鍵を開け、中にある重要資産を移動、処分できるはずです」

「そっか」と書類を受け取りながらユアンは頷いた。

嫌がるリィプを籠の中に押し込んで、改めてメサイアに向き直る。

「いいよ。国民のために使うなら。お宝は好きに処分していいと思う。でもひとつだけ条件があるんだ」

俺もそこに連れて行くこと、というと全員が立ち上がった。

皆そろそろ冒険がしたいと思っていた頃合いだったんだなとユアンは笑顔を浮かべた。

◆

「やはり扉が固定されているようだ。押しても引いてもびくともしない」

ロレンスがそういうのだから、力でこじ開けるのは無理なのだろう。

近くに居たユアンも触れてみたが、古い石の扉はまるでそこだけ時が止まったかのようにぴたりと閉ざされている。

「しかしなんでいきなり閉まったかな扉…」

弱り切ったようにオーガストがため息をついた。

七人が古い隠し通路を進んでここへやってきたとき、この宝物殿の扉は開いていた。

タイタスの持ってきた古い鍵は隠し通路に入っていくときに使ったので、他の鍵を持たずにはたして宝物殿に入れるのだろうかと考えた一行は安堵もしたし、同時に落胆もした。

宝物殿の扉が開いているということは、もうすでに誰かが入った証だったからだ。

思ったとおり、中へ入ってみると宝は何一つ残っていなかった。

ただ仰々しい宝物の設置台が中央に残されていただけだ。

石造りの台にはそれぞれ宝物が置かれていたと思われる窪みがあり、窪みの周りには宝を象徴する彫刻が施され

ていてそれはそれで見事だった。
　しかしその台は人が持ち運んで売り払えるようなものではなかったし、資金難を解決しようとここまで乗り込んできたオーガストやギデオンはがっかりした様子を隠さなかった。
　メサイアとロレンスは部屋の意匠に目を奪われ、彫りつけてあるイグニス文字を目で追うのに夢中になっていたし、タイタスはそれでもなにか収穫はないかとあたりを嗅(か)ぎ回っていた。
　その時である。
　ザンが声を上げたときにはもう遅かった。
　地鳴りを上げて扉が動き出したのだ。
　ロレンスが慌(あわ)てて扉に飛びついたが、彼の脚力をもっても時はすでに遅く、ごおんと音がしたかと思うと七人は闇の中に取り残されていた。
　ギデオンがメサイアを撫でまわしたという、あの疑惑が持ち上がったのはその直後だ。
　そうしてザンがこの部屋に八人目が居ると宣言し、今に至(いた)る。
「なんでお前ら、そう落ち着いていられんのかよ!この部屋の中になんかいるんだぞ!」

　暗やみに覆われた宝物殿にタイタスの泣き言が響いた。
「重い重い」
　ほぼ同じ方向からギデオンの愚痴(ぐち)が聞こえてくる。
『この部屋にもうひとりいる』とザンに告げられ、我慢ならなくなったタイタスがギデオンに飛びつき、そのまま離れなくなったようだ。
「ギデオンに取り付いてるの、それ本当にタイタスだろうな?」
　オーガストが訝(いぶか)しげに言った。
「これはタイタスに間違いないぞ。もう暑苦しいわ煩(うるさ)いわ重いわ、よければ代わってくれ」
　ギデオンが申し出たが、
「嫌だ」
　とオーガストは即答した。
「大丈夫ですよ、タイタス。いまは八人目の気配が消えています」
　なだめるようにザンが言ったがまったくの逆効果だった。
「気配が消えてるってどういうこと…?それは人間なの?」
　ユアンは背筋がぞくぞくするのを感じた。
「そいつもしかして生きてないだろ!やばすぎんだよ!」
　涙声でタイタスが怒鳴(どな)る。

「そんなことより、いまはここから出る方法を探す方が先決です。ここはあまり広い空間ではない。七人居て息がどれぐらいもつか、それも問題です」
　メサイアが少しずつ移動しながら言うのが聞こえてきた。
　部屋の中を探りながら移動しているようだ。
「どこかに隠し扉か、あるいは扉を開ける仕掛けのようなものは……っ!」
　メサイアがいきなり声を詰(つ)まらせる。
「メサイア?」
　ユアンは慌てて声をかけた。
　いったいなにごとだろうか?
　そちらに飛んでいってやりたいと思ったが、ロレンスが急に腕を掴んできたのでユアンは身動きが取れなかった。
　そのまま背後に追いやられ、背中で扉に押しつけられる。
　その広い背が緊張し、彼の剣の柄を握る右腕がもう準備万端なのをユアンは肌で感じ取った。
「どうかした…?」
　ロレンスは返事をしなかった。
　彼にもなにが起こっているのかわからないのだろう。
　ロレンスは危機に対してほとんど反射神経のように振舞うことがあって、いまもちょうどそんな風に体が先に闘う体制に入っているようだった。

「また…現れました」
　ザンが囁(ささや)いた。
　また、あの八人目が。
　その時ユアンの耳にもふと、誰かの足音が聞こえたような気がした。
　軽くステップを踏むような、心許(こころもと)ない足取り。
　その足音の調子にはどこか聞き覚えがあるような気がしたが、それがいつどこでだったのかは思い出せない。
「…大丈夫です。ともかくここを出なければ」
　体勢を立て直したのか、なにごともなかったようにメサイアが言うのが聞こえてきた。
　だからといってそれを真に受けるユアンではない。
　メサイアときたら、平静を取(と)り繕(つくろ)うのがなにより上手いのだから。
「メサイア、貴方はさきほどから貴方にまとわりついている者の正体に、心当たりがあるのではないのですか?」
　ザンが言うとギデオンが低い声で「正体?」と呟(つぶや)いた。
「ここにメサイアの知っている誰かが紛(まぎ)れ込んでいるというのか?」
「だったらなぜそいつは黙ってるんだ?」
　幾分落ち着きを取り戻したタイタスが言う。
「おい!誰だか知らないが!黙ってないでなんとか言った

らどうだ？」

こんなところに閉じ込められてやや切れ気味なのか、オーガストが怒鳴った。

「…もしかしてその者は、俺たちがここに来る前からここに潜んでいたのか？」

ロレンスが低く囁いた。

押し殺したその声色で、ますます用心を深めているのがわかる。

「それはないと思うな」

前と後ろをロレンスの背中と扉に挟まれた格好のまま、ユアンは言った。

「ここに来るまでの隠し通路で、鍵を開けたのは俺だよ。そこを開けないと誰もここまで入ってこれなかったはずだ」

「しかし俺はここにたどり着くまで一番後ろを歩いていたが、誰も付いてくる気配はなかったぞ」

ロレンスの言葉に

「ああ、それにあとからこの宝物殿に入ってきた者もいなかった」

とギデオンが同意した。

「だったらそいつはどうやって入り込んだんだよ？いったいそいつは何者なんだ…？」

苛立ったようにオーガストが地面を蹴る。

「…確かに僕には心当たりがあります」

それまでずっと黙っていたメサイアが、ようやく口を開いた。

「ただ、その者ではありえないのです。それだけははっきり言えます」

「なぜはっきり言えるの？」

ユアンが問うと、メサイアは珍しく黙りこくった。

そうしてしばらくためらってから、囁くように言った。

「その者はこの世に生きてはいないからです」

もうこの世にはいない、メサイアの知り合い…

いったい誰のことなのだろう？

「メサイア、私の耳はごまかせませんよ。あの者の足音ならはっきりと聞き分けられます」

「ザンを疑っているわけではありませんが、それはありえない…」

「貴方自身が一番わかっているのではないですか？あの者はここに居ます」

「ですが…」

ザンとメサイアの押し問答に耐えられなくなったのか、タイタスが怒鳴った。

「だから『その者』ってのは誰なんだよ！」

「その者とは…」

メサイアが大きく息を吐くように言った。

「オセロ・ブラックモアのことだ」

◆

オセロは皇帝候補者のひとりで千年迷宮城でユアンを殺そうとした男だ。

彼はメサイアの元同僚で、メサイアにほとんど妄執と言っていいほどの想いを抱いていたようだ。

彼は迷宮のとある場所までは一同と行動を共にしていた。

だが道が分かれ、メサイアとオセロだけがその後は合流できなかったのだ。

迷宮からなんとか脱出を果たして、その後メサイアとは再会できたが、オセロは姿が見えなくなっていた。

だから彼がどうなったのかはメサイア以外、誰ひとり知る者はいなかった。

あの湖で迷宮城とともに沈んだと言う者もいたし、こっそり逃げ出して、もと居た過激派にかくまわれ、今頃は再び国家の転覆を図っているに違いないと噂する者もいる。

実際に騎士団のブラックリストにはいまだオセロの名が挙がっていたし、捜索の手は湖周辺から帝国全土に広がっていた。

彼がもしどこかで追っ手に捕まれば極刑は免れないだろう。

ユアンはひそかに彼が、今頃は帝国から離れて遠いところで生きていてくれればいいのにとずっと願っていた。

ただ、オセロについては、メサイアがあえてひとことも口にしないことに全員が気がついていた。

だから「もしかして…」という気持ちもどこかにはあったのだ。

「オセロは…やはり死んだのか」

ギデオンが言うと、メサイアは静かに「はい」と答えた。

「彼の亡骸は今もあの迷宮城の内部にあります。脱出する寸前に…僕がこの手で殺しました」

色のない声で告げられ一同は静まりかえったが、おそらくメサイアを責める者はいないだろう。

あの時、オセロの命はもう消える寸前だとザンが言うのを皆が聞いていた。

だからあの城を生きて出られることはあるまいと誰もが思っていたのだ。

「オセロはもう身動きも出来ないほどに弱っていましたが、そのまま僕に殺されることを望んでいました。ただしその願いとは別に、僕は彼があの迷宮を出ることは許さないと

決めていました」

　メサイアの言葉にはなんの感情も込められていなかった。

　だが押し殺せば押し殺すほど、裏側に激しいものが隠されているのだとユアンは知っていた。

「オセロが生き延びれば必ずユアンを殺しにやってくる。それを知っていたからです」

「奴がユアンを殺したがっていたのは、お前を皇位に就けるためだったよな…」

　メサイアの告白を聞いていたタイタスが幾分声を詰まらせながら言った。

「その通りだ。だがそれ以上に彼は知っていたのだ。ユアンを傷付ければ、僕の関心が自分に向くことを」

「ばかな…憎まれたかったというのか」

　わけがわからない、というようにロレンスが呟いた。

「オセロが死んでいることはわかったが…けどだったらこの部屋にいるのはオセロじゃないってことになるぞ」

　ギデオンが言うのを聞いてユアンはハッとなった。

　さっき聞いた足音は、やはり迷宮城で耳にしたオセロのものではなかったか。

　昏く重い情念を腹に貯め込んでいても、迷宮で耳にした彼の足取りは酷く軽くてまるで地に足が着いていなかった。

　その踊るような足音。

「この部屋にはオセロが居ると思います」

　そうはっきりとザンが言うと「はぁ?」とオーガストが訊き返した。

「まさかあんた、死人が…というか幽霊かなにかがこの部屋にいるとでも?」

「そういう…ことになりますか。信じられないかもしれませんが、亡くなった方の足音を聞いたのはこれが初めてではありません。ごくたまにあることです」

　ザンの告白にひいとタイタスが声を上げた。

「やっぱりお化けじゃねえかよ!」

「やっぱりお化けか…ザンの言うことに間違いはないから信じるしかない…」

「おっさんは納得すんなよ!」

「うん?待てよ…じゃあメサイアを撫でまわしてたのはオセロじゃないのか?俺じゃないからな!どうだ、これでわかっただろう」

「おっさんはこのタイミングで無実を証明するのはやめろ!…けどオセロなら辻褄は合うな…て合ってないからな!」

　いつもは冷静なオーガストが混乱している。

「ど、ど、どうすればいいんだ!」

　ユアンが慌てて暗やみを見回していたら、ロレンスが背中で少し押し戻すようにして答えた。

「ユアンはそこを動くな。さっきからこの殺気には覚えがある気がしていた。幽霊だろうが死人だろうが相手がオセロなら容赦はしない」

　幽霊相手に剣が通用するのだろうかと思いながらユアンは頷いた。

　なにか先ほどから…だんだん足音がこちらに近付いてきている気がするのだ。

「どうすればいいのか…答えはひとつです」

　暗やみに、メサイアの凛とした声が響いた。

「幽霊が居ようが居まいがそんなことはどうでもいい。陛下の安全のために、ともかく一刻も早くここから出る方法を見つけることです」

　メサイアのひと言に突き動かされるように、皆が動き出した。

　なにか扉を開くための仕掛けはないかと壁や中央の台を探っているようだ。

　たまにお互いがぶつかって謝ったり愚痴ったりするのが聞こえてくる。

　ロレンスに守られているユアンは身動きがとれないままだったが、そのまま背後に手を伸ばして石造りの扉の表面を探ってみた。

　宝物殿に入るときに見かけたのだが、確かそこにはなにかイグニス文字が書かれてあった。

　ごく短い一文だったと記憶しているが、そのときは気にも留めなかったのだ。

「ユアン?」

「なんかここに書いてあるんだよロレンス。参考になるかわからないけど探って読んでみようと思って」

「イグニス文字か。確かに扉になにか…」

　言いかけて、ロレンスが全身を緊張させた。

　ユアンも気付いている。

　さっきメサイアが『居ようが居まいがどうでもいい』といった瞬間からだった。

　いきなりすうっと気温が下がったような感じがして、それから誰かにじっと見られているような気がした。

　そして『その者』がますます近づいてきた…というような気配がした。

　叫びだして逃げ出したい気持ちに襲われたが、この暗やみではどこへも行けない。

　走り出してもすぐに壁に突き当たるだけだ。

(大丈夫だ、ここには誰より強い俺の騎士が居る)

自分に言い聞かせながら、ユアンは必死に扉を探った。
今できることがそれしかなかったからだ。
「な…『汝』…」
複雑な作りのイグニス文字を手のひら全体で確かめるように撫でて、今はようやくそれだけが読み取れた。
ロレンスがユアンを背に、ますます緊張の度合いを深めている。
なにかがじわりとユアンの元にやってこようとしている。
しかし仲間たちはロレンス以外、そのことに気がついてはいないようだ。
皆懸命に暗い部屋の中を手探りで歩いている。
離れたところからザンの声が聞こえてきた。
「壁の凹凸は一枚の石版から掘り出されているようですね。見事ですが、どこにも隠し扉のようなものがみあたりません」
「つたく床は埃だらけだなー」
咳き込みながらオーガストが言う。
「床にも人工の溝があるな。どうもいろんな文様が彫られているようだが、どこか押せば動くというような箇所はなさそうだ」
同じく埃を気にしているのだろう、口元を押さえているのか、ギデオンの声がくぐもっている。

「くっそ、冗談じゃねーぞ、お化けのいる部屋をひたすら手探りするなんてな！台も仕掛けなんてねーみたいだし…うん?なんかここやたらツルツル…」
「盗賊、それは僕のつま先だ。そのまま台の下を探りたまえ。台の上にあちこち掘られたイグニス文字は僕が読もう」
少し怖さを忘れたのか、愚痴をこぼしながらあたりを探るタイタスとメサイアのやりとりが続いている。
その間も「その者」の足音はどんどん大きくなっていった。
暗やみに睨みをきかせるロレンスにためらう気配もなく、もうすぐそこまでやってきている。
近付いてきた気配に鳥肌を立てながらユアンは必死で文字を探った。
「『禁ず』…」
扉の文字は「汝」と「禁ず」。
その間にも何節か書かれてあるようだ。
「えっと『石』?『…の石を』…っ」
急に誰かの息づかいを背後に感じて、ユアンは動きを止めた。
この部屋のどこにも水気などないのに、ぽつぽつと雫の落ちる音が耳を打つ。

同時にぐしょりと濡れた塊が背中に被さってきた。
それは人の形をしているようで…
ふうっと冷たい息が背後から耳をかすめた。
…そんなはずはない。
ユアンは身を震わせた。
自分と扉の間には誰かが入るような隙間などないはずだ。
緊張のせいなのか、それとも別の理由なのか、扉に沿わせた手が凍るように冷たくなっている。
「ユアン?どうなってる」
ロレンスが戸惑うように囁いたが、ユアンは答えることができなかった。
自分の身になにが起こっているのかわからなかったからだ。
「ユアン?」
ザンがなにかに気付いたように声をかけてくる。
「ユアンがどうしたんだ?ロレンス、お前もそこにいるんだろう?」
オーガストの問いかけにロレンスが「いる」と答えた。
「だが、なにかがおかしい。さっきまであった何者かの気配が急に消えている」
「ロレンス、その者はユアンのところにいます」
ザンの声にロレンスがはっとユアンを振り返る。

暗やみなので様子は見えないが、息がかかるほどお互いが近い。
様子が知りたいだろうに見えなくてじりじりしているだろうロレンスに「大丈夫だ」と声をかけようとして、ユアンは声が全く出せないことに気がついた。
「ユアン?」
ロレンスがユアンの肩を探り、掴んでくる。
その手のひらの温度がじわりと伝わってきてユアンは少しほっとした。
だがその瞬間―
背後から冷たい腕が伸びてきて、ユアンを羽交い締めにした。
体に回された冷たい手が服を通して直接皮膚に触れる。
冷たい指が腹、胸からのど元を目指して徐々に這い上がってくるのをユアンは感じ、戦慄した。
「ザン！ユアンが動かない！体が冷たくなっている」
言いながらロレンスがユアンの肩から手を滑らせ、手首を探り当てた。
顔の前にもう片方の手をかざしてくる。
脈と息を確かめているのだ。
位置的には冷たい『それ』に触れていてもおかしくないのに、ロレンスはユアンを捕らえている腕には全く気付か

ないようだった。

　それでも凍るような手とは対照的に、ロレンスに触れられた場所から暖かさが染みてくるようで、ユアンは懸命にそのぬくもりに神経を集中させた。

「まさか…オセロなのか？あいつがまたユアンにちょっかいだしてんのか？」

　相手が苦手な化け物かもしれないということも忘れ、タイタスが唸るように威嚇する。

「俺たちになにかできることはないのか…？」

「残念ながらギデオン、この闇は…追い払えません」

　静かにザンが答えた。

「扉を開ける方法を一刻も早く見つけることです。なぜか…この宝物殿の中だけ、空気が違う気がするのです。言うなれば別の空間が呼び覚まされたような…」

　盲目のザンは常に闇の中で生きている。

　だからこそ、その闇の密度の違いに敏感なのだろう。

　ユアンは濃厚な闇にまとわりつかれながら、頭の隅でそう考えた。

「ユアンにまとわりついている者の足音は、確かにあのオセロのものですが、なぜ彼の死霊がここに招かれたのか、いったいここでなにが起きているのか、そのきっかけすら私にはわかりません」

　戸惑いながらザンが言った。

　その間も喉に伸びてきた冷たい手が、ねっとりと皮膚を撫で始める。

　悪寒が止まらず、ユアンは歯の根が合わなくなった。

「…っ、ユアン！」

　ユアンが震えていることに気がついたのだろう、ロレンスがユアンの両脇に手をついて、その背後の扉を開けようと力の限り押す。

　だが背中を預けている石の塊はびくともしなかった。

「なにかこの窪みには特別な宝が置かれていたようだ」

　宝物台を探っていたメサイアが早口で言った。

「宝の大きさはとても小さいようだが…指で触れてみた感じではここだけ埃が積もっていないような」

「じゃあ、そこからお宝が取り外されたのは最近ってことか？なんか怪しくないかそれ！」

　オーガストが叫んだ。

「この設置場所の脇に掘られているのは『扉』という字のようです。他にもたくさん字が掘られているようですが、かなり小さくてすり減ってもいるので、指先で追うには時間がかかります」

「難しいかもしれんがメサイアはとりあえずそれを解読していてくれ。それがもしかして謎の核心なら、諦めるわ

けにはいかないからな」

　ギデオンが言うと、オーガストの声が「じゃあ僕たちはまた周りを探ってみる」と答えた。

　ユアンはその全てを遠くに聞きながら、だんだん意識が遠のいていくのを感じていた。

　オセロの影のような相手は首を締めてきたりはしなかった。

　ただ触れるようにしてどんどんユアンの体温を奪っていく。

　さっきまで寒さに震えていたのに、それすら薄れていくのを感じて、ユアンはぼんやり「まずいな」と思った。

　ロレンスがユアンの肩を揺さぶったり、頬をこすってきたりしているのはわかっていたが、その暖かさももうはっきりとはわからない。

　すべてが遠ざかっていく。

　なにもかも失っていく。

　感覚を失うということは、世界を失うことなのだとユアンはふと思った。

『光、触感、味覚、聴覚、お前もすべて失っていく』

　背後からだれかが囁いた。

　耳の中に冷たい息が吹き込まれる。

　そういえばあの時も彼は後ろからユアンを羽交い締めにし、冷たいナイフを突き立ててきた。

『感じられなければ、居ないことと同じだ。お前にとってのだれかも、だれかにとってのお前も』

　君もそうだったのか…？

　ユアンはぼんやりと考えた。

　世界を、大切な相手を、感じたかったのか。

『あのひとを感じられなければ、この世など無いのも同じことだ』

　だけど、それは…

　そのひとにとってもそうだったのだろうか？

『お前を奪えば、俺の名は消えない刻印になる』

　そこまでしなければ、君は存在できないのだろうか？

　―いや。

　ユアンはそれは違うと思った。

　彼が口を噤むときは、彼自身を押し殺しているときだとユアンは知っている。

　彼はその名を口にすることを避け、ひとことも話そうとはしなかった。

　そのこと自体が彼の傷の大きさを物語っている。

　だから…

　そのひとにとっては常に君はそこに『在った』のじゃな

いだろうか。
　この世から消えていなくなったあとも、君は深く刻まれているのではないだろうか。
「俺…も忘れて…なかった」
　ユアンが声もなく呟くと、冷たい指がふと緩められた。
　同時に遠くからロレンスの声が聞こえてくる。
「ユアン？ユアン…！」
　きっと彼はずっと叫んでいたのだ。
　その声が届いていなかっただけで。
『あいつからお前を…奪…』
　ロレンスの暖かい手がユアンの両頬を包む。
　だから暗やみでも信じられるのだ。
「俺は、奪われても、失わない…」
　包まれた頬から少しずつ血が通っていくのを感じる。
　ロレンスの呼ぶ声や、部屋の中に反響する皆の声が耳に蘇ってくる。
　後ろ手に扉を探っていた腕もこわばりが解け始め、ユアンは手のひらにざらりとした石の表面を感じた。
　そこに彫刻された失われた文字—
「『汝、禁忌…の石を持ち、去る、こと、禁ず』…」
「『汝、禁忌の石を持ち去ることを禁ず』と書いてあるのか！」
　メサイアが叫ぶと、その脇でいきなりタイタスが地を這うような唸り声を上げた。
「そういうことは早く言えよ！」
　怒鳴ると同時にパチンと小さな音がして、ユアンは背後の影が急速に離れていくのを感じた。
　背中で振動が起こる。
　大きくなっていく地鳴りのなか、冷たい指先が名残を惜しむようにするりと耳を撫で…
　気がついたときにはユアンは光の中にいた。
　宝物殿の扉が開いたのである。

◆

「どうやらこの宝物殿自体が『禁忌の宝物』とやらを安置しておく祭壇だったようです」
　メサイアがすばやくイグニス文字の羅列を読み解きながら言った。
　宝物殿を包むように作られたホールの天井の一角が切り取られ、そこからちょうど真昼の光が差し込んでいる。
　入り口の床にその光が跳ね返って、宝物殿の中をゆらゆらと照らしていた。

　影と光が交互に刺す空間で熱心に文字を追うメサイアの姿は、まるで水中に居るように見えるなとユアンは思った。
「ここへ入ったときには壁の年代記に気をとられていて、由来を読み込むところまでたどり着いていなかったのですが」
　少し反省するように呟く横で、タイタスが頬を押さえ、呻き声を上げていた。
「ちょ…これ…骨折れたぞたぶん」
　口の中を切ったのだろう、口の端から血が滲んでいて、かなり痛そうに顔をしかめている。
　さすがのタイタスも少し落ち込んでいるのか、とぼとぼと力ない足取りで外へ出てきた。
「本気で殴ることないのに…」
　とユアンが言うと
「本気で殴ってそれでおしまいにする優しさに感謝して欲しいものですね」
　とメサイアがユアンを冷たい目で見る。
　自分に対して怒っているのではないとわかってはいてもかなり恐ろしい。
「こいつはたったひとつ残っていた宝石を下着の中に隠し入れ、陛下の命を危うくするところだったのですよ」
　つまり、タイタスが窪みからそれを取り上げたために宝物殿の扉が閉まり、戻すと同時にまた開いたということらしかった。
　その最後の宝石は、今は元どおりに安置された宝物殿の台座の上で、きらきらと小さな光を放っていた。
　美しいエメラルドグリーンが、迷宮で死んだ青年の瞳を思わせる。
「イグニス時代にはまだ呪術や魔法を使う者が生き残っており、宝物の中にも特別な力を持つものが多く存在したと言われています」
　メサイアはまた手元に目を落としながら言った。
「だから現代の貴族たちもイグニス時代の失われた秘宝には目がないのですが、現存する数が限られているのもあり、そのどれもがかなりの額で取引されています。ただ本当に特別な力を持つかというと、その大半はただの宝石に過ぎないのですが…」
　帝国で一番その秘宝に詳しいのがメサイアだろう。
　贋作を含め、実際に数多くの秘宝を目にしてきたという。
「タイタスが隠していた小さな石は例外的に本当に特別な力を持つというのですか？」
　とザンが訊ねた。
「さあ…ここにはどうも安置した宝を移動するなという警

報が繰り返し刻まれているようで、それ以上の情報は無いようです」

メサイアは顔を上げ、手袋を付け直すと皆の待つ宝物殿の外へ出てきた。

念のために扉を支えていたロレンスとギデオンも入り口を離れる。

「ただ『扉』という名の小さな宝石については、以前にイグニス時代の文献で読んだ覚えがあります。それがここに有るものと同じものかはわからないのですが…」

思い出すようにメサイアは言った。

「たしか『死んだ恋人を呼び戻しに行く際、黄泉への扉を開く儀式に使われた』という曰くつきの宝石で、元々イグニス王家に有ったものだと言われています」

「あの世…じゃあさっきの亡霊は本物ってことなのか？」

とオーガスト。

「そうとも言えないでしょう。伝説はあくまで伝説です」

メサイアがやけに落ち着き払ってそう言った。

「先ほどは空気の薄い場所で視界を奪われ、皆緊張していました。そのうえ死んだ者を印象付ける告白を僕がしたのですから…」

心理的に影響がなかったとはいえないと呟くのを聞いて、ユアンはなんとなくメサイア自身がそれを信じていないような気がした。

「だからといってメサイアを撫でまくったのは俺じゃないぞ」

と痛がるタイタスの首を抱えながらギデオンが言う。

「タイタスのことはもう許してやってください」

とザン。

「まあ僕だってまっ先に見つけていたら、まんまとアレを手にしていたかもしれないしな。安全に持ち出せるってんなら今でも売っ払いたいところだ」

オーガストがため息をついた。

皆で元来た道を引き返していく。

「いや、俺さまが悪い。そのことは認めるぜ。だが俺さまを制裁したのがこの性悪なのが納得できないんだぜ」

ぶうぶういうタイタスをザンが「制裁したのがロレンスなら死んでいましたよ」と窘めている。

そのロレンスならなぜか先ほどからずっと押し黙っているのだが…

見えなくなる寸前にユアンはこっそり宝物殿を振り返った。

暗がりでエメラルドの光が瞬いたような気がした。

それがあの宝物殿を見かけた最後となった。

◆

拝啓　アデル・ジュノー様

お元気ですか。

先日の手紙は慌ただしくなってしまってごめんね。

宝物殿の顛末は、以前に送ったとおりです。

鍵を同封したので、よかったらマーレ島のどこかの崖から海へ投げて下さい。

それでもう二度とあの宝石を目にする者もいなくなるでしょう。

ロレンスは兄ちゃんの言うとおりでした。

やっぱり俺を護れなかったんじゃないかと気にしていたみたいです。

だけどあのとき俺を護ってくれたのは本当にロレンスだったから、俺は彼に言いました。

また同じようなことがあったら、強く手を握ってくれと。

それしか助かる道はないのだからと。

俺も彼が闇に呑まれそうになったら同じようにすると思います。

タイタスに対してはもう誰も怒っていません。

彼がそういう人なのは知っているし、そもそもあの宝物殿の地図を見つけたのはタイタスなので、宝石を手にする権利はあったと思います。

ただメサイアとの仲がまた心配だったので、彼の傷の手当てをメサイアに一任しました。

そのあと双方に傷が増えていた気がしたのですが、気にすることはないとギデオンに言われました。

好きな人に触ったりキスするその代わりに奴らは殴り合っているんだよというのですが、正直意味がわからないなと思いました。

ギデオンがもし誰かにキスする代わりに殴っていたら、それがかなり頻繁だというのもあって、相手はボロボロになってしまいます。

メサイアはタイタスの手当を終えたあと、少しの間城を離れました。

花を持っていたから迷宮城の沈んだキリロス湖へ出かけたのだと思います。

出かける前に、あれは「彼」だったと思う、と言ってみ

たのですが、うんともいいえとも返事はありませんでした。
ただ、僕はいつでも手を汚す覚悟はできています、と思い詰めたように言うので、俺はそれを否定しませんでした。
その代わりに彼に言いました。
もし君が死んだら、俺はこの城を壊してでも宝物殿を掘り返し、あの宝石を使うかもしれない。
そしてきっとあの世まで迎えに行く。
君の手が汚れていたら、それを掴む俺の手も汚れるだろうけど、俺はそのことを怖がったりしないだろう。
君を失うことのほうが怖いし、きっと「彼」もそうだったんだよメサイア。

愛をこめて　ユアン・ジュノー

八人目に出会う場所　おわり

千年迷宮の七王子　番外同人誌
「Into The Night」　2016/10/23
2020/06/30 第四版
ハル有（花鶏ハルノ・相川有）
halyou2015@gmail.com

halyou